〔伊勢物語下〕むかし男有けり、〇中略男いとかなしくて、ねず成にけり、つとめていぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくてまちをれば、〇下略

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕正述心緒

徊徘往箕之里爾、妹乎置而、心空在、土者蹈鞴、

〔古今和歌集五秋〕白菊の花をよめる　凡河内みつね

心あてにおらばやおらんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

〔後撰和歌集十五雜〕太政大臣の左大將にて、すまひのかへりあるじし侍ける日、中將にてまかりて、事をはりて、これかれまかりあかれけるに、やむごとなき人、二三人ばかりとゞめて、まらうどあるじ、さけあまたたびの後、ゑひにのりて、こどものうへなど申けるつゐでに、　兼輔朝臣

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふみちにまどひぬるかな

〔源氏物語四十九寄生〕うちにもきこしめして、ほどなくうちとけ、うつろひ給はん〇女二宮を、いかゞとおぼしたり、みかどと聞ゆれど、〇女父宮二心のやみはおなじことになんおはしましける、

〔書言字考節用集九言辭〕心鬼見源氏、今按正法念經、閻羅獄卒、非二實有情一、以二衆生妄業力一、故見之云々、

〔倭訓栞前編古〕こゝろのおに　源氏にみゆ、列子注に、疑心生二閻鬼一と見えたり、正法念經にも、閻羅獄卒非二實有情一、以二衆生妄業力一故見之と有り、

〔枕草子七〕かたはらいたく、心のをに出來て、いひにくゝ、侍なん物をといへば、〇下略

〔枕草子春曙抄七〕心の鬼とは、心のあやまりを、我と耻おもふやうの心也、

〔源氏物語三十五若菜〕宮〇女三宮は御こゝろのをにゝ、みえたてまつらん〇源氏君もはづかしく、

〔倭訓栞中編古八〕こゝろさらず　心不離の義、万葉集に見えたり、